
吟遊詩人サリュウ

おばけねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吟遊詩人サリュウ

【Nコード】

N5211H

【作者名】

おばけねこ

【あらすじ】

魔獣を魔力源とする世界。魔法を扱う魔道士と、その魔獣はすべて魔術師ギルドのよって管理、支配されていた。ある日、吟遊詩人サリュウが盗まれたリユートを探していると、そこに魔術師ギルドの会員が現れ、ある取引を持ちかけられる…。

序章

抜けるような青空の下に、春花の賑わい。はたまた秋の紅葉を思わせる色の協奏曲。

そんな鮮やかなテントが立ち並んでいる。

テントが覆うのは、原色豊かな果物、野菜。地方では見られない珍しい魚が競うように並べられていた。

ふとすれば、鼻をくすぐる良い香りが立ち込める。巨大な肉塊がその場で切り裁かれ、火で炙られている。胃袋を収縮させる匂い、滴る油のてりが、財布の口を揺るくさせた。

海を渡ってきたというその商人は、白い陶磁器を両手に掲げて、さも希少ありげに声をあげた。

年齢も人種も着ている服装も、そこにいる人間はさまざまだ。

王都アサエア・ナ・アサムの市場では、毎日が祭りの賑わいをみせていた。

世界中の貿易商が一同にここに介し、そして珍品、一品を求めて各国から人々が詰め寄せる。

ここにはないものはない。

物も仕事も金も、笑いも、悲しみも、争いも、恋も。

様々な人々が、ここに何かを求めて集まっていた。

市場を抜けると、円形の広場にたどり着く。

王城アサムの膝元に広がるこの場所は年中、花が絶えることがなかった。

寒さ厳しい季節においても、咲き乱れる花々は、アサムが神の加護を受けている証だとされていた。

人々はこの広場を『神の吐息』と呼び、親しんでいる。

いつもは花の美しさだけが際立つこの広場に、今日は人ばかりで溢れていた。

年齢層は広く、10にも満たない子供もいれば、腰がくの字に曲がった老人もいる。

いつもは獯猛な犬さえも、大人しい。人々がぐるりと囲むその中心には、若い男が

弦楽器リユートを奏でていた。

滑らかな指の動きから紡ぎ出される音は、空気を空気でない何かに変えていた。

例えるなら、雪解け水に咲いた黄色い花。泉から湧き上がる水の透明さ。海から沸き立つ白い淡い吐息。

誰もがその音色に耳を傾けた。

白む荒野にふと佇む二つの影

畏敬するその旭光

ただ祈る

ただ祈る

明日への険路 何事もなく乗り切るために

それは宿運か もう返られぬのか

蒼玄に誓う

明日への険路 くじけけそうとも 耐えられるために

傳くのが正しいのか
かしず

仰望しよう

その血を流そうとも　その涙を溢れさせとも

リュートの旋律に乗って、若い吟遊詩人の声が広場に響いた。

静かな、一片の感情の起伏を感じない。ただ淡々と、物語は詠われる。

言葉が人々の心に自然と刻まれる。吟遊詩人の詩ではなく、永遠の伝承を。

誰もが詩の中に入り込んでいた。

王都には、光もあれば影もある。

地図上で言えば城下町の最北端に、生活水準最下層の国民が住むスラムがあった。

人の影がほとんどなく、複雑に入り組んだ道は見知らぬものを拒否している。

王都の治安を取り締まる衛兵が出入りしていることもあって、犯罪が突出して多いわけではないが、目を盗んでは人身売買や麻薬などの犯罪交渉が盛んに行われている。

そんな危険地帯の路地裏に、若い男が無防備にしゃがみこんでいた。

日の光を浴びて白く反射する髪色は、眩しいほどの、金色。

3色の硬貨を見つめる瞳は、深い深海。だが角度によっては空けるような海の色になる。

背はそれほど高くはない。華奢な優男だ。傍らには綺麗に手入れされたリュートが無造作に転がっていた。

先ほど広場で奏でていた、誰もが恋焦がれたの吟遊詩人だった。

「12枚、13枚、14枚……。347フィンドもある。さすがこ

こは、稼ぎが違ふなあ」

足元に広げた硬貨を数えながら満足げに、呟いた。

詩を歌っていたときとはまるで違う、若者特有の軽さがあった。

吟遊詩人は両手で硬貨をかき集めて、皮袋に入れる。ずっしり重いそれを、肩から下げていた鞆にしまう。

「さて、ラクリはどこかな？」

立ち上がろうと、彼はリュートに手を伸ばした。が、その手は虚しく空を掴む。あるはずのものが、そこにない。

訝しげに詩人はしゃがんだまま、辺りを見回し、一点で止まる。

「君は？」

目線の先に、やせ細った大きな犬が立っていた。毛色は灰色。まるで毛がないかのように短毛。病的に痩せているのではなく、おそらくそれが自然な体型なのだろう。流線的な背、長い脚、すらりとした顔。走ればかなりの速度をだしそうだ。

犬の口には、リュートが咥えられていた。感情ない黒い眼が、吟遊詩人をじっとみつめている。

男は立ち上がり、微笑んで手を差し出した。

「それ、美味しくないよ？・・・あっ」

犬は踵を返し、スラムの奥に向かって走り出した。

「ちよっと・・・まって！」

まるでウサギだ。

跳ねる後姿に、みるみるうちに引き離されていく。

建物が引き締めあったスラムでは、道一本一本が異様に狭い上に、曲がり角が多く、あっという間に見失ってしまった。

吟遊詩人のその男は、ため息をついて足を止めた。追いつく前に、迷子になりそうだったからである。

「あー、何も商売道具盗まなくてもなあ・・・」

しかし、リュートがないと困るのも現実だ。リュートは一つ作るのに何ヶ月も要してしまう。その間、くいぶちが無くなるのは死活問題だった。

宮廷などに所属している音楽師とは違い、街から街へと吟遊している立場では、詠わなければ、奏でなければ、その日一日生きていくのが難しい。

・・・仕方ない。

男は犬が消えた道を再び、歩き始めた。だが走りはしない。あくまでも、徒歩だ。

行けどもいけども、似たような風景だった。

右を見ても壁、左を見ても壁。たまに違うのは、食い散らかしがあるか、張り紙らしきものが無造作に丸めてあるか、はたまた洋服が脱ぎ散らかしてあったりと、何かの残骸が道を汚しているときだ。

自分の足音しか耳には届かない。

今度は歩くのをやめなかった。リュートを見つけだす、という目的もあったが、立ち止まると自分が、道に迷っている事実を突きつけられるのを恐れていた。

それほど、道は複雑だった。

「あらー、困っているようね」

突然、頭の上から明けずっぱな、女の声が降り注いだ。

「これを探しているんでしょ」

太陽の光に遮られて、はっきり姿が見えなかった。

が、見覚えのあるリュートの影が目にとまった。

「それは俺のだ。返してくれないか？」

片手で日差しを遮りながら、吟遊詩人はなんとか、声の主を探ろうとした。

こげ茶色の髪を肩まで伸ばし、毛先は幾重にも巻いている。やや釣り長の瞳は暗い紺。美人ではないが、まだ幼さを残す可愛い顔をしていた。年は10代後半か20代前半に見えた。

女は民家2階部分の、雨避けに立っていた。普通の女はそんなところは、登ったりはしない。

「返してもいいけど、条件があるわ」

「金か？」

正直、なれていた。路銀を狙う賊とのやりとりは、過去、何度もあった。自分の無防備さが引き起こしているとも言えるが、これは旅人の宿命だろう。

「お金もいいんだけどね」

女が首をかしげ、片足をぶらぶらさせている。

詩人は少し考えると、左掌を右手のこぶしで軽く叩いた。

「お金じゃないなら・・・、俺のファンで添い寝したいとかかな。お嬢さん」

「女に困ってなさそうな顔だけど」

女はリュートを奏でた。音が流れた。だが、吟遊詩人が紡ぎだすそれとは、程遠いものだった。

「じゃー、なんだ？命か？まあ、俺の命をとったところで、なんの足しにもならないと思うけど」

詩人は肩をすくめて、おどけてみせた。

「あら、そう思ってるのはあなただけじゃないの、サリュウⅡタロツグさん？」

女の言葉に、吟遊詩人の目がすっと細まった。

「なんで、俺の名前を知ってる？」

声が鋭くなる。二人を取り巻いていた空気が、一瞬で硬くなる。

女は少しも動揺せずに、言った。

「魔術師ギルド、執行部のミリアナⅡバレイシュ。お目にかかれて光栄です」

恭しく会釈した態度とは、裏腹に、女――ミリアナの目は嘲笑に満ちていた。

吟遊詩人、サリュウは歯を強く噛んだ。奥歯が鈍い音を立てて擦れた。

刹那。左足に激しい痛みが走った。たまらず倒れる。みると、灰色の犬の牙が深く突き刺さっている。鮮血が飛び散る。すでに犬の顔は血で真っ赤になっている。

「ぐっ・・・」

引き離そうと犬の耳を掴んだが、余計に力を口に入れられた。血が吹き出る。

筋肉が裂ける。サリュウの顔にも血が飛び散った。犬は無感情の目で、噛み付いたまま動かない。

ばかりと、何かが折れる、鈍い音がした。

スラム街にあがる絶叫。

「あっ」

血まみれの吟遊詩人の視界に、大きな褐色が、口から赤いものを滴りさせているのが映った。

サリュウは苦痛に顔を歪めながら、褐色のそれに叫んだ。

「馬鹿っ、なにしてるんだ！！！」

褐色は声に反応して、尻尾を振った。そして口に咥えていた物を吐き捨てる。

「何って助けにきたんじゃないか、相棒」

流暢な言葉を喋ったのは猫、というには大きすぎる猛獣だった。

目の周囲に入った模様が、彼の恐ろしさを引き立てている。

鈍い音は、サリュウからではなかった。

灰色の犬が左後ろ足をかばって倒れている。現れた、猫科の猛獣にかまれたのだ。

犬は必死に起き上がり猛獣から離れる。だが、犬の左後ろ足は血だらけで、ありえない方向に曲がっている。

「ごめんな、悪気は無かったんだ。ほんとに、ごめん」

サリュウは犬に向かって声をかけた。

自分が先ほども噛まれていたのを忘れているかのような、優しい声だった。

犬は無言で、ミリアナのすぐ下まで3本脚で這っていった。

その様子をみながら、大猫がぼやいた。

「悪気は、あった」

「ラクリ、うるさい」

「・・・・・・・・」

ミリアナは音もなく屋根から下りると、犬の横に立った。飛び降りた、というより

宙に浮かびつつ、ふわりと、地に降り立った。

彼女は、犬のほうは少しも見ない。

「噂ほどでもなさそうね。またあとで会いに行くわ。じゃあね」

「ちょ・・・・・・・・まっ」

サリュウが言い終わる前に、ミリアナと灰色の犬は影形無く消えていた。

第1章・・・1

なんとか宿屋まで辿り着くと、サリユウは噛まれた右足の手当てをした。

幸い筋肉の一部が少し切れた程度で、神経などは無事で問題なく動かせた。

清潔な水で洗い、自ら縫い、葉草を挟んで包帯で巻く。

もう旅をして12年になる。大災害に巻き込まれたり、盗賊の一味に襲われたこともあった。山奥で命にかかわる大怪我をおったこともある。

これぐらいの怪我だったら、自分で治療をすることができた。

「今日の飯はうまかった!」

大猫は暖炉の前で腹を見せて、寝転んでいた。

サリユウの怪我には目もくれない。

夕飯で食べた鹿の炙り肉を思い出しているのか、涎を垂れながらの前足を幸せそうに舐めている。

「なあ、ラクリ」

包帯を巻きながらサリユウは、大猫―ラクルゼット―に声をかけた。

ラクリとは、サリユウが呼びやすいように好んで使う呼称だ。

ラクルゼットは腹ばいになり、顔をあげた。

「あ? 明日の朝飯の相談か?」

「違うよ」

飽きれてサリユウはため息をつく。

「昼間の女、魔術師ギルドの人間みたいなんだ」

「どう考えても魔術師ギルドの人間だろ。魔法使ってたしなあ」
半ば馬鹿にしたようにラクルゼット。

「魔法」という技術は、魔術師ギルドに入会していなければ、使うことができない。

ギルドには、魔術師ギルドのほかに、冒険者ギルド、商業者ギルドなどがあり、仕事紹介や教育・支援制度など相互の関係を持っていたが、魔術師ギルドだけは孤立した存在にあった。

それは魔法の技術を門外不出にすることで、ギルドの絶対的な権力を保持するためである。

魔術を使うものを「魔道士」と呼び、魔道士の隣には、魔力の源である「魔獣」が、必ずいた。

魔獣の存在は、否応がなしに、自分が魔道士であることを周囲に知らしめる。目に見えない力と、その閉鎖的なギルドに偏見を持つ人は多く、魔道士であることを隠したがる会員も多かった。

だが、サリュウが気にしているのはそんなことではない。

「俺の名前を知っていた。そしてやつは、わざわざ魔術師ギルドの人間だと、俺に言った。そして、取引を申し出た」

「なんのだろう？」

目を丸くしたラクルゼットに、サリュウの顔が苛ついた。

「おまえ、とぼけてるのか？俺に気を使ってるつもりか？」

語尾が、荒くなっていた。今にも怒鳴りだしそうなサリュウの剣幕に、ラクルゼットは、困ったように顔を歪めた。

「分からないものは、わからん」

そのとき。サリュウとラクルゼットは、ほぼ同時に背後へ振り向いた。

音を立てて、窓ガラスを風がたたいた。

半瞬後、黒い影が床に落ち、そこに彼らは現れた。

いかにもな黒いマントに身を羽織ったミリアナと、その横には細い犬が静かにたたずんでいる。

「足、大丈夫かい？昼間はごめん」

サリュウはその姿を確認すると反射的に表情を改めた。そして、ラクルゼットに向けた表情とは打って変わって、やさしい眼差しで犬に謝った。

犬は昼間のことが無かったかのように、無傷である。犬はサリュウ

ウの方向こそむいていたが、無反応だった。

「普通にドアから入ってきたらどうだい」

ラクルゼットがふんと、鼻を鳴らすと、ミリアナは片眉をあげた。

「なんのために？面倒くさいわ」

「ドアがあるんだから、ドアからはいる。扉をノックしてから入る。そんなの常識だろ？！」

「意味分らない。そんなことしなくなって、入れるもの」

「おまえ、着替え中に他人が入ってきたらイヤだろ！」

「入らないように魔法しておくけど・・・？」

ミリアナの顔はまじめに答えた。それよりも、洋服を着ない魔獣がなぜそんなことをいうのか、不思議がっているような顔だった。

「魔道士ってのは狂ってやがる」

ラクルゼットは悪態について、立ち上がると身軽にベッドの上に飛び乗った。

そして、寝ることにしたのか、枕に頭を乗せてそっぽを向いてしまった。

サリユウはため息をついて、ミリアナを見た。

「それで？リユートを返してくれる気になったのか？」

「条件に応じてくれるなら」

しばし、沈黙のあとサリユウは口を開いた。

「条件って？」

ミリアナはにんまりと、唇を笑わせた。

「条件を呑む、呑まない？それによって言うわ」

「はあ？条件も聞かないうちに、そんなの答えられるわけないだろう」

「断るならいいわよ、別にそれで・・・」

ミリアナが片手を振ると、見覚えのあるリユートが音も無く、彼女の手に現れた。

奪い返せないのが分かっているので、サリユウは手を伸ばさない。ミリアナは満足そうに、リユートの腹の部分を叩いた。乾いた音

がする。

「これ壊してもいいんだ？」

サリュウの使っているリユートは、思い出深い大切な一品なのだ。幼いころ、憧れた存在があった。流浪の年老いた吟遊詩人だった。サリュウは毎日、彼の歌にただ聞きほれた。

何もせず、ただただ、彼の声に耳を傾けた。

正直、難語が多い詩の意味などは全く理解できなかったが、静かだが滲み出る吟遊詩人の感情、リユートの美しい心をうつ旋律に心奪われたのだった。

ある日、年老いたその流浪人が、リユートを差し出した。

艶々と日の光に反射し、リユートに傷ひとつない。まだ、完成したばかりの新しいリユート。まだ一曲もしらない、初心なそれを老人はサリュウの手に握らせた。

――私の最後の子供だ。この子はまだ何も知らない。

君の手で、この子を成長させてあげてやってくれるかね？――うれしかった。体の中で蠢いていたもやが、一瞬にして消え去る感覚を覚えた。それから、寝る間も惜しんでリユートを練習した。詩を覚えた。

気づいたら、行きかう人が足を止めていた。吟遊詩人として、もう12年たっていた。

あのリユートは、自分の命と同じだ。あのリユートが壊れるということは自分が、壊れるのと同じだ。

サリュウは自然と首を横に振っていた。

「駄目だ。返して欲しい」

「じゃあ、呑むのね？」

「……」

即答できなかった。

ミリアナのことは、何も知らない。寝食ともにする相手だったら、二つ返事をするだろう。無理な要求はしないことを、わかっているから。

だが、彼女は違う。赤の他人だ。しかも、魔術師ギルドの人間。信頼できない。

「男のクセに決断力がないわねえ。こっちにはこういう選択もあるわよ」

ミリアナが指を鳴らすと、リュートは消え、片手剣が彼女の手握られていた。

油が滴りそうに煌く刀身に、サリュウの顔が映った。

サリュウは少しも動じず、ミリアナの目を見た。

「剣で勝負か？」

「まさか、私、そういう野蛮なことはしないの」

剣が空を切ると、刀身から青白い光が発した。光はサリュウに向かって走った。音もなく脇を通り、壁に当たって消えた。壁が一部崩れて、石の破片が床に散った。閃光の通った跡は、黒く焦げている。

「大丈夫か？」

ラクルゼットの声に、サリュウはやっと我に返って、自分の頬に手をやった。

血がついていた。光に全く反応できなかった。

「・・・つまり、殺すってことか？」

「そう。あなたを殺しても、私は罪に問われない。理由は、自分がよくわかってるわよね？」

「本気のようにだな」

深い息をはいて、サリュウは犬を見た。犬の目は黒く、外見からは白目がみえなかった。視線をミリアナに移して言った。

「わかったよ。その条件、呑もう」

月明かりが、褐色の被毛を金色に輝かせていた。ラクルゼットは宿屋の上に乗る、王都アサムの街並みを眺めながら、毛づくろいを

していた。

眠らない街、アサム。アサム城の窓からは、ランプの淡い光が漏れ、白い城壁を美しく浮かび上がらせていた。

「おまえ、犬のくせに屋根に上るとは、器用だな」

ラクルゼットが背中を舐めながら言うと、闇にまぎれていた影が、姿を現した。あの、細い犬だった。

「気づいていたのか」

流暢な言葉使い。落ち着いた口調だった。

ラクルゼットは舐めるのをやめ、犬にシニカルな笑いを向けた。

「風上にいたら、匂いでわかる」

「そうか」

犬は腰を落として、座った。ラクルゼットの半分も満たない体の細さ。足にいたっては、骨と皮しかなく、筋が走っているのすら見えた。

「あなたのマスターは、魔法を使わないんだな」

抑揚のない犬の声。大根役者が台本を読んでいるかのような棒読みだった。

ラクルゼットは、ふんと鼻をならした。

「サリュウは魔道士じゃねーからな。魔法を使わないのは当然だろう？」

「魔道士じゃない？」

あくまでも、淡々として犬は言った。

「あなたは、魔獣ではないのか？」

「魔獣だよ。他になんだと思う？」

「魔獣としか、思えないが、魔道士でない人間と、なぜ、あなたが一緒にいるんだ？」

顔にも肉がないから、表情が少ないのだろうか、とラクルゼットは思った。

「何でって言われると」

「あなたの、魔は？」

犬が突然、質問を変え、訊いた。ラクルゼットは姿勢をただし、髭をぴんと張った。

月の光に、髭が白く煌いた。

「悟りの魔獣、ラクルゼット」

「悟りの、か。私は、時の魔獣イゼラーン」

「時のさんね、よろしく」

ラクルゼットは口の片端をあげて、にやりと笑った。

イゼラーンは神妙な顔つきをしたまま、ラクルゼットをみつめた。

「悟りの。もう一度、問う。なぜ、悟りのの、マスターは魔法を使おうとしないのだ？」

マスターではないが、とラクルゼットは思ったがそれは言わないでおこうと思った。

「サリュウは魔法が嫌いなんだ。だから、俺も魔法は使わないしね。それだけ」

淡々と説明する。

「魔法が嫌い？」

はじめて、イゼラーンの声に感情が籠った。

少し驚いて、だがラクルゼットは優しい顔になって頷いた。

「ああ」

「……」

イゼラーンは、落ち着いてはいたが、明らかに戸惑った表情を浮かべた。

「それは、私たち魔獣の存在を、認めないのと同じだ」

第1章・・・2

朝になると、ミリアナの指示で街道を走る辻馬車に乗り込んだ。馬二頭だての貧相な馬車だった。御者は、2匹の魔獣をみて露骨に嫌な顔をしたが、サリュウもミリアナも気にしないで乗り込んだ。

辻馬車は、王都アサムを離れ、荒野を走り出した。王都アサムは木がまばらにしか生えない、土地に建設されていた。

それは王が強大な権力を誇示するために、わざと立地困難な場所に王都を作ったといわれている。

馬車の揺れは思ったより酷かった。土地が整備されていないからだろう。

サリュウは馬車内に垂れた、安全紐を掴んだ。

「まだ、条件というのを聞いてないんだが？」

「まあ、これをみてよ」

ミリアナは腰につけたポーチから、羊皮紙を取り出して、サリュウに渡した。サリュウは用心深く受け取ると、文面に目を落とした。そこには、こう記してあった。

『次のものを速やかに拘束し、ギルド裁判にかけることを命じる。』

エノンⅡクレイパス 元魔術師ギルド会員 会員番号0342
第34班 本部研究員

尚、不測の事態においては死を持って処罰することを、問わない。
遂行不可の場合は、速やかに本部に連絡をすること。

魔術師ギルド総本部 総師 アジュシヴィ
Ⅱセシレ』

署名には、魔法印と呼ばれる特殊な印鑑が押してあった。魔法印は、魔術師にとっては血判と同じで、他人は真似ができない模様が浮かび上がる。

つまり、これが魔術師ギルド総本部の最上位、総師が下した、勅命であることを証明していた。

「……で？」

嫌な予感を感じながら、サリュウは羊皮紙をミリアナに返した。

「この犯罪人がどうかした？」

「エノンⅡクレイパスを拘束しようとし、過去、何人もの魔術師がエノンの元に行ったわ。でも、誰も戻ってこなかった」

徐々に小さくなる王都を見つめながら、ミリアナが言った。そして、窓枠に頬杖をついてため息をつく。

「正直、この任務を遂行する自信がない」

「なら、やめればいいじゃん。出来ない仕事を請けるとは、身の丈知らずってやつだ」

ラクルゼットが間髪いれずに、せせら笑った。ラクルゼットの真向かいに座っていたイゼラーンが、低く抗議の唸り声をあげた。刹那、サリュウの拳骨がラクルゼットの頭に落ちた…。

「ミリアナ、俺に何をして欲しいんだ？」

「私は死にたくないわ。だから、このエノンを拘束するのを助けて欲しいのよ。」

この任務は極秘で遂行するように慣行が出ている。任務を失敗したら、私は逆にギルドに抹殺される。エノンを拘束し、ギルド本部に連れて行くしか、私には選択肢がない。あなたの力を借りたいの」

「わかってないみたいだが」

サリュウは首を左右に回して、肩をほぐした。

「俺は、魔法は使わない」

ミリアナはゆっくりと数回瞬きをし、まっすぐサリュウを見つめた。

「使えないわけでは、ないんでしょ」

沈黙が落ちた。

馬車馬の大地を踏みしめる音だけが、規則正しく耳に伝わった。たまに、車輪が石を跳ね上げて、窓にあたる。

王都アサムはすでに、見えなくなっていた。

「ちなみに、どこに向かってるんだい？」

沈黙を破ったのは、やはりラクルゼットだった。

「エノンⅡクレイパスがいる場所」

答えたのはイゼラールだった。イゼラールはどこを見ているのか、目線を一点からはずさない。

「ほう・・・なるほどねえ」

ラクルゼットは、地名を聞いたかったようなのだが、それ以上は聞き返さなかった。

再び、重い沈黙が馬車を支配した。

サリュウは、羊皮紙に記されていた一部分が、目に焼きついて離れないでいた。

エノンⅡクレイパスには全く興味が沸かなかった。

自分が、ミリアナに手を貸すかも、どうでもよかった。

ただ、羊皮紙の最後にあった「総師 アジュシヴィⅡセシレ」の名。

その名を思い出すと、なんともいえない奇妙な感覚に陥った。

よく知っている名前だった。魔術師ギルドを総括するその人物の顔も、性格も、サリュウはよく知っていた。

最も尊敬し、憧れだった人物。全信頼を置いていた。総師のようになりたいと、切に願っていた。一生、この人の下にいたいと思った。

12年前までは。

サリュウは親指の爪を無意識に噛んでいた。

「頼むから、もう許してくれないか」

その独白は、誰の耳にも届いてなかった。

荒野を流れる小川まで走ると、御者が馬を休ませたいと、小休止を申し出た。昼近いこともあり、一時の休憩をとることにした。

幸い、緑が生い茂った大木が一本だけそびえていたので、日差しを遮ることもできる。

サリユウ達は馬車を降りると、思い思いの格好でくつろいだ。

ラクルゼットが小川の水を飲んでいると、そのすぐ横にイゼラーンが伏せて、水を飲んだ。そして、舌で口の周りを舐めてから、クールな双眸を向ける。

「悟りのは、マスター（サリユウ）が魔法を使っているのを見たことはあるのか？」

「ないよ」

ラクルゼットは即答した。

「12年間一緒にいるが、一度も。」

……でも、サリユウが魔道士だったってことは、知ってるぜ」

「過去形なのか？」

意味深なイゼラーンの発言に、ラクルゼットは真顔になり、

「おまえは、サリユウが今でも魔道士だと思うのか？」

「一度たりとでも、魔術を扱ったことがある人間は、生涯、魔道士だと思う」

「消せない、過去ってか？」

語気が少々強くなった。

「悟りの」

あくまでも、イゼラーンは冷静だった。

「自分が魔法を使わなくても『悟りの魔獣』だと胸を張っていえるか？」

「いえるよ」

ラクルゼットは頭を振りかぶった。

「俺は、悟りの魔獣以外の何者でもない」

「そういうことだと思う。ただ、人間は素直ではない」

イゼラーンは返答を待たず、木陰のほうに歩いていき、ミリアナの側で伏せた。

ラクルゼットは穏やかに流れる水面を眺めた。

本当にそうなのだろうか？

サリユウは確かに、昔は魔道士であったようだ。――ようだ、と断定できないのにはわけがある。

ラクルゼット自身は、サリユウが魔術師ギルドの会員であったことは知っているが、彼が魔法を使ったところは一度も見ることがないからだ。そして、サリユウは自分の魔道士時代を語ることを選んでいるようだった。だから、ラクルゼットも尋ねたことはない。

この12年間、魔法を使ってないのだから、魔道士ではない、と断言してはいけないのか？

過去はかえられないのか？過去に、目を背けたらいけないのか？ラクルゼットは分からなかった。

休憩を終えると、馬車は再び走り始めた。太陽は真上から、西に傾き始めたいた。

ミリアナによれば、目的地はさほど遠くないとのことだった。

馬車の中は特に会話もなく、一同は無言のまま馬車の揺れに体を預けていた。

突然、強い揺れが馬車を襲った。

「きゃあ」

ミリアナが悲鳴をあげた。馬車の中は重力が崩れ、ラクルゼットの体がサリユウ

の体にまともにぶつかった。衝撃で、サリユウはガラスに頭を強くうち、そのまま

ガラスが割れる。細かい破片が飛び散った。

馬が嘶いた。いなな断末魔の悲鳴。激しく何かが打ち付ける音。馬車の側面は地面を

こすって、横転していた。馬車が動きを完全に止めると、一番身軽なイゼラーンが

割れた馬車の窓から這い出した。続いてミリアナが外に出る。

「ドアをあけてくれー」

ラクルゼットは、床面になった側から這い出そうとして、もがいている。地面と窓の間に挟まっているようだ。

「ちょっと、のけ」

頭から流れてくる生温いものを感じながらサリュウはラクルゼットを押しつけ、

空を仰いでいる馬車の扉を力任せに押した。一回。二回。三回、体当たりしたところで、ドアが開いた。ラクルゼットの背中に足をかけて、外に飛び出る。

ガラスで切った頭が痛かった。視界を邪魔する血を服の袖でぬぐいながら、辺りの様子を伺った。

「……！」

目を見張った。

馬車馬の体に、人の背丈があらうかという、大鎌が突き刺さっていた。

もう一頭の馬の頭は、もうない。

「わ……わ……」

顔面蒼白の御者は屍餅をつきながら、後ずさりしている。

ミリアナと、イゼラーンも呆然と立ち尽くしていた。

「何が起こったんだ？」

状況がつかめず、サリュウも立ち尽くしかなかった。

だが、これは事故ではないことが、巨大な鎌が静かに物語っている。

突風が吹いた。一瞬で目の前が砂埃に覆われる。強い横風に、周囲の砂が撒き散らされ、体中に激しく打ち付けた。その場にいた誰もが、思わず顔を隠した。

風が止んだ。ぴたりと静かになる。

サリュウはそっと、目を開けた。

いつのまにか、倒れた馬の側に人影があった。その男は、いつも

簡単に巨大な鎌

を片手で操り、馬の体を刻んでいた。

「な、なにあいつ」

ミリアナの愕然とした声。

無理はない。そこにいるのは、人間ではなかった。

黒髪の上にターバンを巻き、髪の間から人よりも長い耳がはえて
いる。

目は、褐色だが、瞳が細い。つくりは人間に近いが、どう見ても、
人ではない違和感があった。

上半身に服は着ておらず、無駄のない筋肉質な体が頭になってい
た。

その背には、人間にはありえない黒い翼が風に揺れていた。
足にいたっては、鱗が生えており、足先は完全に、猛禽類のそれ
だ。

鳥人間とでも称すればいいのだろうか？

「魔獣・・・ではないな」

イゼラーンがポツリと、呟いた。

鳥人間は、サリユウ達にはまったく気づいていないかのよう
に、慣れた手つきで馬を解体していた。そして袋につめている。

「サリユウ、あいつ何者だ？」

やっと脱出できたのか、息を切らしながらラクルゼットがサリ
ユウの横に並んだ。

「わからない」

サリユウ自身も動揺していた。どうすればいいかわからなかった。
人間と動植物。そして魔獣。自分がこの地に生まれたときから今
の瞬間まで、それ以外みたことはなかった。

「わー！！」

恐怖に洗脳されたのか、業者が大声をあげて逃げ出そうとした。
「ばけも」

化け物。御者は言い終わる前に、絶命していた。

巨大な鎌が、体もろとも、心臓を突き破っていたから。

「な・・・」

サリュウの目の前で、御者が真つ二つに割れて崩れ落ちた。

誰も鎌が動くのを見ていなかった。

咄然として、言葉の出ないサリュウのすぐ横に、音も無くその鳥が飛んできた。羽音がまったくしないが、確かに羽ばたいている。

ふわりと、地面に舞い降りると大地に突き刺さったその鎌を、引き抜いた。

鳥人はサリュウ達のほうは、一瞥もくれない。

「これは、食べられないな。さすがに」

鋭い鍵爪をした足で御者の頭を蹴ると、翼を持った男は袋を担いで、空に舞い上がった。

黒い羽が、一枚、サリュウの足元に落ちた。

「ちよつと、待て！」

サリュウは叫んでいた。

鳥が顔だけ、振り向いた。羽ばたきながら、空に止まっている。逆光になって、表情までは読めない。

サリュウは臆せず、睨み、怒鳴った。

「おまえ、自分の欲望のために簡単に殺していいと思ってるのか！」
怒りのあまり、手が震えている。

「説教したいの？」

鳥の声は、笑っていた。

「俺、そういう、面倒くさいの、嫌いなんだよね」

強い風が吹いた。

「なんだと？ 人が一人死んでいるのに、どういう神経してるんだ！
罪の意識がないのか！」

「サリュウ、止めなさいよ」

危機感を覚えたのか、震えた声でミリアナが制した。完全におびえている。

「サリュウ？」

鳥人間が素っ頓狂な声をあげた。そして鳥人間は、まじまじとサリュウの顔を観察した。

「サリュウって、サリュウⅡタログ？」

鳥人間は、サリュウに訊いた。

サリュウは、頷いた。

「そうだ」

「本当に？」

「ああ」

サリュウは、怪訝そうな顔でもう一度、肯定した。自分の名は、その道では知られているため、これが本物か、と驚かれるのは至極当然だったが、それとは違うと感じた。

鳥人間の表情は急に和らいで、再び舞い降りてきた。そして、巨大な鎌の刃を大地に刺すと、サリュウに抱きついた。

熱い抱擁に、サリュウは一瞬、呆気にとられた。

「さりゅー！会いたかったよー！」

鳥人間は、嬉々として喜んだ。

「何年ぶり？もう会えないかと思ったよ。元気そうよかった！こんなところで会えるとは。生きててよかったあ！」

サリュウの手をとりながら、小躍りして鳥人間。

ラクルゼットもミリアナも、その言葉をどう受け取ってよいかわからず、サリュウの出方を見守っていた。

「俺は、おまえのこと知らないが？」

サリュウの冷静な言葉に、鳥人間は頭を抱えた。

「そりゃないよ。あんなに仲がよかったのに。」

あー、でも、こんな姿をしてたんじゃ、分からないのは無理ないよね」

言うが早いが、いきなり自分の翼を掴むと、羽をむしり始めた。

漆黒の羽毛が、次々と音も無く大地に積み重なっていく。

「おまえ、やめろ！自分の体を意味なく傷つけるな！」

ラクルゼットは見かねたように、吼えた。

鳥人間は翼から手を離し、地面に座り込んだ。

「はぁ、俺って本当に馬鹿だ」

そして、今度は号泣しはじめた。

殺戮を犯した先刻とは、まるで別人。鳥人間の姿は哀愁が漂っていた。

「：名前さえ言うてくれれば、覚えてるかも：」

鳥人間のあまりの変貌ぶりに、サリユウは怒りも忘れいた。

すると、鳥人間は顔をあげて、サリユウを見上げた。涙で目が真っ赤だった。

「セツツ：バルリィⅡミケルソン」

号泣しすぎて、声が揺れている。セツツバルリィⅡミケルソン？

「セツツバルリィ・・・」

声に出していうと、堰をきったように記憶がよみがえった。

一緒に声をあげて笑った。一緒に遊んだ。一緒に、いたずらをした。

サリユウの唯一の、幼馴染だった。

「あー」

サリユウは声を上げていた。

「セツツ！セツツなのか、本当に」

「うん。覚えててくれていた？」

「あたりまえだろ！忘れるはずがない！」

サリユウはセツツの手をとると、強く握った。

「生きていたのか。俺も会いたかったよ」

これほど嬉しい再会はないと思った。サリユウはすっかり警戒を解いて、セツツの手を持って、立たせた。

「でも、どうしたんだ。この格好」

サリユウは躊躇せずに、疑問をぶつけていた。記憶の中のセツツは、翼や、鳥の足をもたない、普通の人間だったから。

「うんー、ちょっと騙されて・・・ね」

セツツは言葉を濁した。

「知り合いなの？」

ミリアナが恐る恐る二人の会話に割って入った。

「ああ、俺の幼馴染なんだ。昔の」

「幼馴染って……」

ラクルゼットは最後まで言わなかった。

が、サリユウにはラクルゼットが何が言いたかったか、すぐに察知できた。

「昔…ギルドで一緒だったんだ。な？」

サリユウがセツツに目をやると、セツツはサリユウから目を逸らした。

「じゃ、俺行くわ」

セツツは鎌に手をやると、急に空に舞い上がった。

それ以上、話をしたくないかのように。

「セツツ！」

サリユウが呼びかけると、セツツは振り返り

「サリユウ。気をつけろよ」

と、言った。そして、暫く空打ちしながらサリユウを見ていた。

「セツツ……」

「じゃあ、な！」

にこりと微笑んで、手を振るとあつという間に、セツツは空高く昇り、

東の方向に飛び去って行ってしまった。

「魔術師ギルドの人間なのか？」

沈黙を守っていたイゼラーンが、サリユウに訊いた。

サリユウはセツツの消えた方向から、しばらく目を動かさせないでいた。なんだろう。

とても、胸が苦しい。この不安はなんだろう。

……魔術師ギルド。この言葉が、重い。

「あんな鳥人間、きいたことないけど」

ミリアナは腕を組んで、首をかしげた。

「サリユウ」

空を見上げたまま動かないサリユウにラクルゼットは呼びかけたが、彼は反応しなかった。

第1章・・・3

綺麗な白い花が、太陽の光をいっぱいに浴びて咲き誇っていた。庭の真ん中には小さな噴水もある。端から端へいくのに30秒もかからない小さな庭園だった。周りは壁に覆われている。ここは、建物の中庭なのだ。

壁は天高く聳^{そび}えている。そこは魔術師ギルド本部の中だった。

庭に敷き詰められたエメラルドグリーンに輝く芝生の上で、6歳サリュウは分厚い本を読んでいた。時折小鳥の声が聞こえる。

「さーりゅーう」

目の前が突然暗くなった。

「わっ」

サリュウは視界を遮るものを、やんわりとどかして、振り返った。黒髪黒目の、サリュウと同一年ぐらいの少年が、笑顔を向けた。その肩には小さな白いネズミがのっている。

ネズミはサリュウをみて、ぺこりと頭をさげた。

サリュウも自然と顔が綻^{ほころ}ぶ。

「セツツ！」

「なにしてるのー？」

少年のセツツは元気よく、サリュウの横に座った。

サリュウは持っていた本を少年の膝に置いた。

「んー、なにになに？」

セツツは、本を両手でかかげた。肩にいるネズミも必死に目をこらしている。

セツツはうなった。

「この魔法文字、難しくて読めないんだけど！」

「古代魔法の本なの。神様が使っていたっていわれてるんだ。いま、それを教えてもらっているの」

サリュウが説明すると、セツツは本を無造作にめくった。

まるで暗号のような文字が、びっしりと羅列されている。

「俺にはぜんぜんわからないなあ。眠くなっちゃうよ」

「僕もまだ、半分ぐらいしか、わからないんだ」

少年のサリュウは、言葉を選びながら言った。嫌味になってはいけない。と、無意識のうちに考えていた。

「あ、そうそう！」

セツツはサリュウの心内を気にしていない様子でポケットから小さな南京錠を取り出した。すでに鍍金が剥がれ、ところどころ錆だし、手垢で汚れた南京錠だった。

セツツは鍵のかかった南京錠を大事そうにサリュウに手に乗せ、「見てもよ」

自分の片手をサリュウの手にかぶせた。

セツツは目を閉じて、集中した。

サリュウは黙ってその様子を見守っていた。

小鳥がどこかに羽ばたいていくのが聞こえた。

と。カチっという小さな音がして、セツツは手を離した。

南京錠の鍵があいていた。

「どうだ！」

自慢げにセツツ。

「おー！」

サリュウは驚いて、セツツを見た。満面の笑みでセツツは南京錠をポケットにしまった。

「すごいっしょ！まあ、2週間かかったんだけどね！」

「2週間じゃなくて、3週間の間違い！」

と、セツツの肩でネズミが抗議した。

「おまえ、余計なこと言わなくていいよ！」

セツツがネズミの頭を指で小突くと、ネズミが指に噛み付いた。大げさに痛がる黒髪の少年。

サリュウは思わず、声をたてて笑った。純粹に、楽しかった。

サリュウとセツツは、年齢が近いせいか、気があって仲がよかった。

た。魔術師ギルドでは、9割は大人だ。この狭い世界で、二人が仲良くなるのは、ごく自然なことだった。

「こんなところにいたのか」

楽しい空気が一変した。

サリュウとセッツは声の方向を見上げた。ネズミは急いで恭しく頭を垂れる。セッツは急に表情を硬くさせて、立ち上がり、声の主に向かって深く礼をした。

主は、サリュウしか見ていない。

サリュウは、本を小脇に抱えて立ち上がった。

「昨日の復習をしてたんです」

「そうか」

声の主は、長身の男だった。年齢はわからないが、とても綺麗な顔立ちをしており、色白だった。はしばみ色の瞳は切れ長で、腰までかかる長い髪は銀髪だった。彼の名は、ナサニエルという。

「話がある」

「話ですか？」

サリュウはちらりと、セッツを見た。セッツは、小さく頷くと、もう一度ナサニエルに頭を下げて、逃げるようにその場から離れて行った。

「また、あいつと仲良くしているのか？」

男の冷徹な双眸はサリュウを見下すようだった。

「サリュウは、自分の立場が分かっているのか？おまえは、このギルドの第3位なのだぞ？あんな、居ても居なくても分からないような奴と、軽々しく話すだけでも、おかしい」

「僕は、そういう考えはもっていません」

サリュウはきっぱりと否定した。男の眉がかすかに動く。

だが、サリュウは気にしないで続けた。

「僕は確かに、セッツよりも魔法が使えます。

でも、それだけです。

僕はセッツが好きだし、彼といえると楽しいんです。

何が悪いんですか？」

「おまえは、社会というのが分かってないな」

男はサリユウの考えなど少しも受け入れる気はなかった。

「ギルドには、おまえの能力を僻み、嫉む者が沢山いる。

だが、おまえに逆らうことは誰も出来ない。

そういう者が、目の敵にするのは誰だ？嫉妬の標的にするのは誰だ？おまえが目をかけている、あの、セツツではないのか」

目をかけているわけではないが、サリユウのお気に入り、ととられてもおかしくはなかった。

ナサニエルの言ってる事は、もつともだとサリユウは思った。厳しい階級制度の前に、サリユウにたてをつくものは誰一人としていない。

魔術師の世界は、その能力が絶対な権力と比例する。

誰もが上に這い上がろうともがいている。自分以外の魔道士は敵に等しい。

彼らならやるだろう。能力の低いセツツに対し、酷い仕打ちをするだろう。

セツツはサリユウには何も訴えないだろう。ひたすら、一人で耐えるはずだ。サリユウに迷惑をかけたくないから。

「僕……誰とも仲良くしちゃだめなんでしょうか？」

サリユウの悲しげな声に、ナサニエルの顔は優しく微笑んだ。膝を折って、サリユウを

抱きしめる。

「私がいるだろう？」

サリユウはナサニエルの肩に顔を置いた。

「……うん。お兄ちゃんがいるから、さみしくないよ」

「それでいい」

やさしく髪を撫でるナサニエルの目は、笑ってはいなかった。

馬車馬と御者を土に埋めて弔ってから、サリユウたちは荒野を歩

いて進むことにした。

まあ、人もほとんど通らないここでは、そうするしかなかったのだ
が。

少しづつだが、周りの草木が増えていつているのがわかる。なぜか
緑は、心に安心感を

生む効果があるらしい。残酷な殺戮と、セツツの衝撃から、一同は
少しづつ、普段の精神状態に戻っていつていた。しかし、サリュウ
だけ違った。

何を考えてるのか、黙りこくり、足並みも遅かった。時折、立ち
止まり、どこか空を仰ぐと、また歩き出す。その繰り返しだった。
3人はサリュウの異変に気づいてはいたが、誰もが、それを指摘し
ようとしなかった。できなかったのかもしれない。

歩き続けてへとへとになったころ、ラクルゼットの提案で再び、
休憩をとることにした。すっかり日もくれていたが、前方には幾重
にもつながる山がみえはじめていた。

薪になる枝を手分けして捜している最中も、サリュウは一人で座
ったまま動こうとしない。

「ねえ、一応、吟遊詩人なんですよ？　なんか歌ってよ」

薪に手をかざしながら、ミリアナが言った。

ミリアナの手をかざした場所から、小さい火が起こった。赤い光
と温かい空気が、サリュウ達を包んだ。空には満点の星が広がって
いる。

「リユートがないから無理だな」

答えないかと思ったが、意外にもサリュウが口を開いた。感情が
こもってなかったが。

思わずミリアナとラクルゼットは顔をあわせた。

イゼラーンは黙って、火の側に伏せた。

「わかったわよ」

ミリアナが片手をふると、サリュウの前にリユートがゴトンと音
をたてて、現れ、落ちた。

「別に、いつでも取り返せるし」

「そうか」

サリユウは、リュートを手に取ると、感慨深げに触った。1日会ってないだけなのに

10年ぶりの友と再会したような、そんな気分だった。

サリユウは足を組むと、その上にリュートを座らせた。すっぽりと収まる。まるで体の

一部のようなだった。サリユウは、そっと弦をなでた。

詩はなかった。

だが、リュートの旋律には、人々の喜び、怒り、葛藤、苦しみ、恋を伝えていた。空気のように当たり前に、風のように自然に、その旋律は心の中に響き、染み渡っていく。

星が共鳴するように、瞬いていた。月はサリユウを優しく照らす。ミリアナは目を閉じて聞き入っていた。いつのまにかイゼラーンはきちんと前足をそろえて座っていた。ラクルゼットさえも、サリユウの奏でる詩のない歌に、じっと耳と傾けている。

あきらかに曲の途中で、サリユウは指を止めた。

ミリアナが不思議に思って、目を開けた。

「どうしたの？」

サリユウはため息をついて、リュートを床に置いた。

「俺、やっぱり魔道士なんだろうか？」

「なんで？」

ラクルゼットは深刻そうにうつむくサリユウを、下から見上げた。

「魔法使わないんだったら、魔道士じゃねーよ」

「でも、俺は確かに、魔術師ギルドの人間だった。しかも、ただの会員じゃない。第3位、導師だった」

「過去は、過去だろ？」

「だが：過去があって、今がある。ラクリと一緒にいるのだって俺が、魔道士だったから・・・だろ？」

「会えたのはそうだけど、別に魔道士だから一緒にいるんじゃない

ぜ」

ラクルゼットの言葉はサリユウに届いていないのか、彼はため息をつくだけだった。

「悟りのに聞いたのだが」

イゼラーンが珍しく、自分からサリユウに話しかけた。

「魔法を嫌っているそうだな。魔道士も嫌いなのか？」

「……ああ、両方嫌いだ」

サリユウは下を向いたまま答えた。イゼラーンはまっすぐ、サリユウを凝視している。

「あなたは、私に優しくしてくれるが、私にとっては、魔法をけなされることは、私の存在を認めていないのと同じだ。この辛さ、分かってもらえるだろうか？」

どきりとして、サリユウはイゼラーンを見た。イゼラーンはサリユウを冷静な眼差しで見据えていた。黒い眼に、炎が燃えている。

「私はマスターを尊敬しているし、絶対の信頼を置いている。

なぜなら、マスターは魔獣の存在や立場を理解されているからだ。

私を常に側に置き、私の魔力で魔法を使ってくれる。それが、理解されてる何よりの証拠だ」

イゼラーンの考えは、魔獣たちが持っている至極普通の、考えだった。

サリユウはもちろん、それを知っている。

なぜなら、魔獣にそういう概念を植えつけていた側の人間だから。何も答えないサリユウを、ラクルゼットはじっと見つめていた。

ミリアナは、小枝で焚き火をつつきながら、言った。

「私、よくわからないんだけど」

小枝が炎に飲み込まれていく。

「なんで、魔法を捨てようと思ったの？」

私は魔術師ギルドで修行をしていたころ、あなたの名前を、イヤってぐらい聞いた。

いいえ。今でも、ギルド内ではしょっちゅう、聞く名前よ。

いないのにね。

天才とか、神の子とか。使えない魔法はないって。

本当は総師ですら足元に及ばないぐらいだったって。

しようと思えば、世界だって支配できたんでしょ？

なんで、ギルドを抜けたの？もったいないと思わなかったの？」

サリユウは両手で顔を隠した。ぱちぱちと焚き火が音を立てる。

「ごめん、思い出したくないんだ」

サリユウはやっと喉の奥から、声を絞り出した。

「……」

ミリアナも何かを察知したのか、それ以上追及しようとしなかった。
た。

虫の音だけが、そこに響いていた。

第1章・・・4

鳥の声で、ラクルゼットは現実に取り戻された。辺りはすっかり明るくなっていった。はっとして、顔をあげ、周囲を見回す。

昨日のサリュウの状態が、気になっていた。

ミリアナはイゼラーンを枕にして、まだ寝ているようだった。イゼラーンは目こそ閉じているが、耳が動いている。おきているのだろうか。

ラクルゼットは立ち上がった。サリュウの姿が見えない。

「サリュウは？」

声をかけると、イゼラーンは目をあけた。

そして、右方向を一瞥する。みると、サリュウが背中を向けて立っているのが見えた。

「サリュウ！」

小走りに近寄ると、サリュウが振り向いた。

「おはよう、ラクリ。珍しく早起きだな
にこりと微笑む」

いつもサリュウだった。ラクルゼットはすっかり安心して、胸をなでおろした。

「おはよう！よかった。元気になったのか？」

「まあ、昔のことを今考えても、どうすることもできないし。魔法を使わないことだけは、間違っていないと思ってるから」

「ああ、それでいいよ」

ラクルゼットは賛同した。本当に、それでいいと思った。俺はサリュウを信じている。サリュウは魔獣の存在を否定しているわけではない。ラクルゼットは自分に強く、言い聞かせていた。

「ありがとう、ラクリ」

サリュウが感謝の念をあらわすと、

「ああ」

ラクルゼットは嬉しくなつて、前足でサリユウの足を軽く叩いた。人間でいえば、励ましの意味も含まれていた。

サリユウもラクルゼットの頭を数回、撫でると、ミリアナたちのほうに歩いていった。

「おい、いつまで寝てるんだ？」

「うーん」

ミリアナはマントを掛け布団代わりにして寝ていた。

「もう少し、寝かせて」

「暢気だな」

サリユウは切り株に腰かけ、自分の旅かばんを探った。手に感触があり、掴みあげる。昨日、王都で買っていたパンだ。

「ラクリ、ほら」

大猫の前に、パンが弧を描いて落ちた。ラクルゼットはパンを一瞥した。

「サリユウ・・・俺に、こんなものを食わせる気？」

「こんなものって、パンだよ。昨日、買ったやつだから大丈夫だよ」腐っていないよ、とサリユウは付け足す。

「ばか！これは草だ！」

「はあ？」

サリユウが目を丸くすると、ラクルゼットは力説した。

「パンの材料は草！俺は肉食獣なんだぞ！」

「草って・・・小麦だろ？別に食べたくないなら、食べなくていいですよ」

サリユウがパンを拾おうとすると、ラクルゼットの右前足がそれより早くパンを捕らえた。サリユウが呆氣にとられた視線でラクルゼットを見た。ラクルゼットはパンを口もとに引き寄せて、かぶりついた。

「仕方なく、くってやる」

「……初めから、食え」

「もう、うるさいわねー」

ミリアナは目をこすりながら上半身をあげた。枕役から開放されてイゼラーンは、立ち上がって伸びをした。ミリアナも両腕を天につきあげ、体を伸ばす。

「あー、よく寝たー!」

「緊張感のない奴だなあ……。犯罪人の場所まで、まだあるんだろ?」

サリュウの質問に、ミリアナは服についた泥を落しながら、

「山奥の村だからね」

と、言った。

ラクルゼットはこれから登ろうとする、山並みを眺めた。登山口はすぐそこだが、山自体は幾重にも重なっていて、村は見えない。

「この山のどこなんだ?」

「まあ、奥のほうじゃない?」

「おいおい、ちゃんと確かめて来てくれよ」

飽きれてラクルゼットは顔をしかめた。

ミリアナは腕を組んで、吐息を付く。

「それが地図にもないような、小さな村らしいのよね。」

まあ、歩いていればそのうち向こうから、姿を現すわよ」

「なんで、そんなことがわかるんだ?」

サリュウが目を鋭くさせた。

「犯罪者なら、普通、隠れるだろ?」

「普通はね」

ミリアナの口調は、冷静なものに変化していた。

「このエノンの罪状は、殺人及び、無許可魔獣所持んだけど」

「殺人?」

サリュウの握った拳に力が入った。爪が食い込み、赤いものが一筋流れだしたのを、イゼラーンは黙ってみていた。

「ギルドで魔獣欲しさに殺人を行い、脱走。」

更に拘束しようとした魔道士を、ことごとく殺害し、彼らの魔獣を無断で所持しているの」

「……酷い」

奥歯を強く噛み締めて、サリユウが呟く。強い憤りに支配された。意味のない殺人だ。どうして、簡単に人を殺せるのか？自分の欲望のために。

「なるほど、俺やイゼラーンを餌にして誘き寄せるってわけね」

と、こちらはラクルゼット。

「そういうわけじゃないけど。まあ、実質そうね」

ミリアナは、肩をすくめた。

「そんなに何頭も魔獣を所有しても、意味ないだろ」

抑揚のない声で、サリユウが言った。全く感情の表れないそれが、逆に怒りを感じさせた。

魔法の強さと、魔獣の数はまったく関係ない。術者である人間が、いかに自分の中に魔力を保持できるかが、魔力の強さに関わっている。

魔術師は魔獣の『血』である『魔力』を、いったん、術者の体内に取り込み、自分の中で魔法を具現化し、発動させる。本来「異物」である魔力は、体内で拒否反応を起こしやすい。それは最悪、死を意味する。

そのため、いかに魔力に順応できるかが、魔術師の実力を決めることになる。

「魔獣の魔力を全て吸い取って、何か大きな魔法を使おうとしてるとか？」

ラクルゼットの考えに、サリユウは否定した。

「それは、ありえない。人間が魔力を保持できる量は、魔獣から比べたら、微々たる物だ。

俺は、限界まで魔力を保持しようとして、死んだ魔道士を何人も見ている。

今まで、誰一人として、どんな小さな魔獣をも越える魔力を、保持できた人間はいない。

だから、複数所持したところで、何の意味もないんだ」

「まあ、理由はエノンに、実際会えばわかると思うわ」

ミリアナの言葉が、正しかった。

今ここで考えていても答えは出ない。

サリュウ達は、エノンが居るといふ山に向かって歩き始めた。

第1章・・・5

サリュウはずっと先頭を歩いていた。一心不乱に、山道を突き進んでいる。

ラクルゼットは12年間、寝食ともにしてるが、未だに彼の考えがよく分からなかった。

今まで、サリュウとの間に、魔法に関する話題が出た試しは、一度も無かった。だから、魔道士だったことは、吹っ切れたのだと思っていた。だが、今回の件で、サリュウがかなり過去を気にしているのが分かった。

ラクルゼットは、サリュウが魔法を捨てた理由も、嫌悪する理由も、知らない。

サリュウがエノンという人物に興味を抱いているのは、分かる。だが、エノンと会うことは、命の危険を伴うし、魔法を使う気がないなら、行っても意味ないだろう。それとも…、いざとなったら魔法を使う気なのだろうか？

ラクルゼットは声をかけた。遠慮がちに。

「サリュウ、エノン逮捕に結構、乗り気なのか？」

「乗り気ではないけど」

急斜面に足を取られて、サリュウは反射的に側にあった木に手をかける。

なんとかこらえた。

「簡単に命を奪う奴を見てみたいだけさ」

再び、サリュウは歩き始める。落ち葉を踏む、さくさくという音が山に広がる。

「そうか。リュートはどうでもいいのか？」

「……」

サリュウがラクルゼットに頭だけ振り返って、目をやった。明らかに、睨んでいた。

ラクルゼットは目を逸らさずにサリユウを見る。

「ごめん、言い方間違った。けど…いや、なんでもない」

「なんだよ」

サリユウの口調には棘があった。

「途中でやめるなよ」

「もういいって」

今、魔道士に関する話題を出したら、確実に怒るだろうと思った。

「おまえ、俺に喧嘩売ってるのか？」

怒鳴りだしそうなサリユウの剣幕に、ラクルゼットは泣き笑いの表情を作った。

「そんな、怒るなよ」

もともと感情の起伏が激しい性格だとは思っていたが、今日のサリユウは妙に苛苛していると思った。

サリユウは何も言わずに、また歩き出す。歩く速度が早くなった気がする。

後方にいるミリアナ達と、かなり距離があった。ミリアナは山道に慣れておらず、それに付き添うイゼラーンは歩みが遅い。二人の位置は姿こそ確認できるが、何かあったとき、すぐに近づける場所ではない。相互に助け合う必要は全くないのだが、ラクルゼットは、仲間意識が芽生え始めていた。サリユウに、そんな意識はあまりなさそうだが。

仕方ないのでラクルゼットは、サリユウとミリアナ達との中間辺りを進むことにした。

しかし、サリユウはどんどん先にいってしまう。彼の背中中は、魔道士だけでなく、

ラクルゼットも拒否しているようだった。一心不乱に、先へ先へ進んでいる。

「サリユウ、どうしちゃったんだろう？」

ミリアナ達を一瞥してから、ラクルゼットはサリユウを早足で追

いかけた。サリュウを
一人にさせるわけにはいかなかった。

黒い鳥が太陽の光を背に浴びながら、羽ばたいていた。
風を切り、雲を通り抜ける。

山も川も、鹿の群れも、たまに見える旅人も、全てが同一の風景
でしかない。

鳥には、翼以外の2本の腕が生えていた。

右手には、巨大な鎌がついた柄と、自分の体よりも大きな袋が握
られている。

袋は赤黒く染まっており、時折、赤いそれが重力によって下におち
ていく。

左手で袋の中を漁り、口に持っていく。引きちぎった馬の生肉だっ
た。

「ん？」

黒い鳥―セツツバルリイは、瞳孔を開いて、それをよく見ようと
した。

音を立てて骨を噛み、馬肉を飲み込む。

「……あれは」

山に引きめしあう、木々の陰に何か動くものが見えた。そこに住
む、野生動物でないことが、直感できた。

旋回し、「それ」を見つけた、はるか上空で空打ちする。彼の視
力は人間よりもずっと優れていた。

「もしや」

セツツは、体を反転させ、ずっと遠くに目を凝らした。

そこにある山よりも、更に奥の山を。

渡り鳥の一団が横切った。セツツの目はそれには反応しない。
風に黒い髪がなびいた。

まさか…な。セツツの胸がざわついた。

無意識に、馬肉を漁り、口に入れる。生臭さが口いっぱい広がる。

サリユウは、あいつの元に行こうとしているのか？

そういえば……、セッツは頭を整理した。

昨日、サリユウの側に、女と魔獣がいた。

一匹の魔獣はサリユウのだろう。

サリユウが、ギルドから抜けたとき、魔獣を一匹連れていたと聞いている。

では、あの女は魔道士？

なぜサリユウと一緒に居る？

噂でサリユウは、魔法を捨てたと聞いていたが。

「また、か」

セッツの顔がどす黒く変貌していた。右手に握っていた袋を、投げ捨てた。

死の鎌が弧を描いた。袋は中身ごと、粉々になり飛び散り、風に浚われて消えた。

「今度こそ、許さない」

大きく翼を広げると、セッツは全速力で飛び出した。

「あ」

山頂まで登ると、谷下に広がった光景に、サリユウは思わず声が出た。

そこに、小さな村里が広がっていた。

確認できるだけで22軒。村の半分以上が畑で覆われている。

家のところどころからは、白い煙が立ち昇っていた。人が住んでいる証拠だ。

山を登り始めてから、すでに半日がたっていた。

あと数時間で、闇夜が訪れる。

「サリユウ、ミリアナ達とはぐれちゃったぜ？」

ラクルゼットが遅れて、サリュウの横に立った。そして、眼下に広がった村に感嘆の声をあげた。

「あれか？例のやつが、いるところは」

「分からないけど、たぶんそうだろう」

谷下に下りようとしたサリュウのズボンを、ラクルゼットは噛んでとめた。

「ちょっとまってよ、ミリアナ達がいないと、危ないぜ」

「…そうだな。ここで待ってよう」

あっさりとサリュウが同意したので、ラクルゼットも安堵した。今日のサリュウなら、無防備にエノンと対峙しかねない。もともと無謀な性質だとは思うが。

サリュウが、突然振り返った。刹那。がさり。草がゆれた。ラクルゼットも遅れて、後ろを向いた。

小さな人影が、そこにあった。

サリュウもラクルゼットも、次にとる行動が咄嗟に思いつかなかった。小さな、女の子の前では。

大きなカッパの瞳が印象的な可愛らしい、少女だった。赤い髪を耳の上で二つに結び、兎を想像させる。年は10歳を少しすぎた風貌。膝丈より少し短い、厚手のスカートをはいていた。

「こんにちは。その村の子？」

サリュウが微笑みかけると、女の子も笑った。ほんのり桃色の頬が、彼女の愛らしさを引き立てている。

「こんにちは」

ハキハキとした声で、女の子が答えた。

「旅人さん？」

「うん、まあ…そういうものかな」

サリュウが曖昧に答えると、少女は

「私を逮捕しにきたんじゃないの？」

と、いった。

あまりにも自然な口調だったので、サリュウもラクルゼットも、

すぐにその言葉の意図するものを、つかめなかった。

「ちがうの？」

女の子がどんぐり眼を、さらに丸くさせた。

ラクルゼットは半歩、下がった。

「もしや、エノン……？」

姓名までは、思い出せなかった。

「あ、やっぱり、あたしの名前知ってるんだ」

エノンは、けらけらと声に出して笑った。

「じゃあ、死んでもらうしかないと思うの」

エノンが片手をあげた。半瞬後、獣が襲い掛かってきた。

白く長い毛を持った魔獣だった。毛に隠れて目が見えない。前足の指は2本しかないが、巨大な鍵爪がついていた。

獣は一直線に、サリュウを狙った。

「……っ！」

鋭い爪が首にかかる寸前で、ラクルゼットが白い獣に体当たりした。

2匹の魔獣はもんどりうって、地面に倒れた。

白がすばやく立ち上がったが、ラクルゼットは優れた瞬発力で、白い後脚に目掛けて、前足を叩き込んだ。堪えられず、白いそれが倒れる。

飛び上がり、ラクルゼットは馬乗りになった。迷わず喉元に噛み付く。

「ヒィィィ」

白い魔獣は絶叫して、あばれた。鮮血で、白の喉元が真っ赤に染まった。

「ラクリ！」

やりすぎだ。サリュウは相棒の行為を止める前に、木に叩きつけられた。全身の骨が悲鳴を上げ、頭が真っ白になった。

「ふー」

熱い吐息が顔にかかった。顔を振ってなんとか、意識を鮮明にさ

せると、目の前に、寧猛な口を空けた熊の顔がそこにあった。

「……！」

はつきりとした、恐怖を感じた。心臓が、どきんと強く鳴った。

「があ……！」

唾液に貼りついた牙がサリュウに襲い掛かった。体が、硬直して動けない！

「させるか！」

どん。サリュウは強い衝撃を感じて、飛ばされた。一瞬、やられたのかと思ったが、痛みがなかった。目を開ける。自分にラクルゼットが、覆いかぶさっていた。

「ラクリ！」

サリュウは、体の痛みを忘れて、手を伸ばしたが空をつかむ。

ラクルゼットの体が宙に浮いた。巨大な熊がラクルゼットの背中にかぶりついていたのだ。両足をばたつかせる猫を、熊は軽々と啜えて、2本足で立ち上がった。熊はいよいよやるように、ラクルゼットを口に入れたまま首を振った。赤い水滴が周囲に激しくとんだ。そして、思い切り近くの木にたたきつけた。毬のように、ラクルゼットは跳ねてサリュウの前に落ちた。

「ラクリ！」

背中肉が裂け、白いものが見えていた。褐色の毛は、すでに赤色にかわっている。目が激しく充血していた。

それでもラクルゼットは唸りながら、立ち上がると、サリュウを守るように踏ん張った。

「おまえら……なんの恨みがあるんだ？」

荒い呼吸が口から漏れる。口からねっとりとした、液体が地面に落ちた。

ラクルゼットにはさすがに、これ以上、戦える自信が無かった。それでも気持ちを奮い立たせるように吼えた。エノンを見据えて。

「おい、何の目的で、俺たちを殺そうとする」

「殺すのはその人だけよ」

エノンはラクルゼットの背後にいるサリユウを、指差した。

「あなたは、あたしの仲間になるの」

「ふざけんな」

ラクルゼットは牙をむいた。

「誰がお前の」

「エノン」

遮って、サリユウが言った。

「魔術師ギルドからは、逃げられないよ」

酷く冷静な声だった。

今までの喧騒を一蹴するような、淡々とした旋律だった。

熊も、エノンもサリユウを凝視した。

しかしエノンはすぐに目を釣りあがらせ

「ふん。あんたに、何が分かるの？魔術師ギルドの何が分かるの？何も知らないくせに！えらそうなこと、いわないでよね！」

少女は足元にあった石を拾うと、サリユウに投げつけた。

石はサリユウに額にあたって、落ちた。額から一筋の血が流れ落ちた。サリユウは、力なく首をふった。

「俺は魔術師ギルドのことで、知らないことは、何もない。だから、わかる。ギルドは必ず、君を追いつめ、捕らえるよ。

今ならまだ間に合う。大人しく、投降するんだ」

「分かったような口聞かないで！早く、殺しなさい！」

エノンが命令すると、魔獣が再び身構えた。

「エノン」

再度、サリユウは呼びかけた。

「俺を殺したら、本当に、死ぬよ」

エノンの顔が、凍りついた。辺りの草木も、空気も、時間さえも、氷に閉ざされた。

これほどまでに、恐ろしい静寂はなかった。

サリユウは抑揚のない口調で言った。

「俺を殺したら、アジュシヴィが、お前を殺す」

第1章・・・6

魔術師ギルドで最高位の称号、総師を名乗ることが許されたただ唯一の人物。

アジュシヴィーセシレ。世界でもっとも実力のある魔道士だ。

たとえギルド会員の魔道士であって、総師に会うことが許されるのは一握りの上層部のみ。

総師がどんな人間なのかは、ほとんど闇に隠されていた…。

「総師！」

乱暴に両開きの扉が開いたとき、アジュシヴィはちょうど、ティーカップに口をつけたときだった。声の主を一瞥して、不機嫌にソーサーに戻る。

「なんです、無礼な」

「申し訳ありません、ですが」

「礼儀がない者とは、話す時間はありません」

総師は革張りの椅子に、深く腰かけると、机に広がった羊皮紙に目を落とした。

「申し訳ありませんでした。ご無礼をお許してください」

声の主は、セッツだった。肩で息をしながらも、なんとか呼吸を整える。肩膝をつき、右手を胸にあて、最敬礼をした。

アジュシヴィの透き通った緑色の瞳が、セッツの方向に動く。

「なんですか？」

「お話したいことがあります」

セッツは膝を突いたまま、顔をあげた。

「話とは？」

総師の目が細まった。淡い七色の真珠を思わせるその髪が、かすかに揺れた。

「サリュウのことです」

「…出て行きなさい」

静かな総師の声。

セツツは引き下がらない。

「お願いします。聞いてください」

「出て行きなさい」

先ほどより語気を強めて、総師が言った。強い眼差しがセツツを睨んでいた。

セツツは額を床につけた。

「お願いします。どうしても、聞きたいことがあるんです」

「無駄です。話すことはありません」

総師は、セツツの要求をかたくなに拒否した。

「お願いします。お願いします！」

何度も額を床にこすりつけた。

「何しても無駄ですよ」

セツツが、歯ぎしりしながら立ち上がった。

部屋の中に、強い風が吹いた。窓はどこも、開いていない。

棚に置いてあった、花瓶が煽られて床に落ちる。カーテンがたなびく。

冷めた目で、総師が顔をあげる。彼女の長い髪は少しも揺れてはいない。

「反抗的ですね、ずいぶん」

音もなく、ティーカップが粒子になってソーサーに崩れた。

総師は粒子と化したお気に入りのカップを一瞥する。

「何がしたいんですか？」

「話を聞いて欲しい」

「それはできません」

セツツの右手に巨大なデスサイズが現れた。鈍く光る灰色の刀身に、総師の顔が映った。

「ぶっ殺してやる」

鎌を振りかぶり、振り下ろす。

常人だったら、それすらも動体視力が捉えられない速度だった。

が、彼女と紙一重のところ、鎌が止まった。

それ以上、どんなに力を込めても鎌が先に進まない。筋肉が硬直し、痙攣し、悲鳴を上げる。

「ぐ……っ」

前にも後ろにも、動かない。なのに、腕の筋肉だけは、渾身の力をこめたまま、限界を超えようとしている。

鎌の刃に力が伝わって震えていた。

筋肉が、筋が、骨が、軋んだ。

腕が……壊れる……！

「……総師、きいてください……」

懸命に腕の破壊に耐えながら、セツツは訴えた。

「12年前……のこと。もう……見逃してやったらどうです……。うっ」
更に激痛が走った。急に手のひらに力が入らなくなり、鎌が音とたてて床に転がった。だが、上腕部と前腕部の筋肉は張り詰めている。

「あまり口が過ぎると、今以上の地獄を味わうことになりますよ」

総師は椅子から立ち上がると、セツツに背を向け、窓から外を眺めた。

窓の外には、巨大な都市が広がっている。

鈴の音がした。

机の脇から、銀色の狐が現れた。首に、鈴をつけている。

狐はセツツに目をくれ、つまらなそうに欠伸をして、後ろ足で耳をかいた。

「セツツ。大人しくしていなさい。そうすれば、何も心配要らないのです」

アジシヴィは神のような微笑を浮かべた。あくまで、表情だけは。

部屋から追い出され、廊下に投げ捨てられたセツツは、両拳で廊下の床を叩いた。幸い、腕には疲労感はあるものの、無傷だった。そのことが更に自分を空しくさせた。己の無力さに強い憤りを痛感

した。

悔しくて、気持ちの行き場がなかった。

立ち上がり、壁に数回、拳を打ちつけた。関節が砕けた。

「くそっ……」

涙が一粒流れた。背中に生えている翼の根元に手をやると、思い切り捻った。酷く鈍い音がして、片翼があらぬ方向に向いた。折れていた。

セツツは重い足取りで、魔術師ギルド総本部をあとにした。

「なんで総師が私を殺すの？」

エノンはけらけらと、笑い声をあげた。まるで大道芸人をみているように。

「あの人は、自分以外の魔道士を、虫けらかゴミぐらいにしか思っていないのよ。」

私が魔道士を何人殺そうが、あの人が動くことはないわ」

「そうだね、普通の魔道士ならね」

サリュウの青い目が、エノンの赤茶色の目を見据えた。

エノンの表情が一瞬、こわばった。

「どういう意味？」

「俺は、罪を犯し、ギルドを逃げ出してきた。」

でも、もう長い間、誰も俺の元を訪れていない」

12年間、誰もサリュウを拘束しようと、投降させようとしてこなかった。

「どうでもいい罪だったんでしょ？」

はき捨てるように言ったエノンに、サリュウはシニカルに笑った。

「君も魔術師ギルドの会員だったなら、知ってるだろう？」

魔術師ギルドに加入するということは、魔法に命を売ったということ。

魔術師ギルド規定第一項目……」

「脱退は、即ち死」

2人の声が重なった。

サリユウが頷いた。

「ギルドにとって、もっとも恐れているのは他への魔術の流出だ。だから、脱退や破門は死を意味する。

でも、俺のもとには12年間、誰も来なかった」

「どうして？」

質問した彼女は、子供の顔だった。

サリユウは下を向いて、ため息をつき、ゆっくり天を仰いだ。
うつすらと、月が色づき始めている。

「誰も：俺を殺す自信がないから」

梟がどこかで、鳴いた。

「あなた、誰なの？」

震えた声で、エノンは両腕を、だらんとさせた。

サリユウは、一呼吸置いて、名乗った。

「元魔術師ギルド導師、サリユウⅡタログ」

「：導師さま?!」

熊が小さな声で呟き、頭を垂れて平伏した。

「サリユウ……って：あの：導師……？」

エノンの目が驚愕の色に染まった。一步、後ずさりする。

サリユウが在籍していた時代に、彼女はまだ生まれていないはず。
なのに、彼女は、サリユウの名前を知っている…。

ラクルゼットは、サリユウの魔道士時代を知らない。だが、ひし
ひしと、魔道士としての存在の大きさを、思い知らされた。

「いったいどんな魔道士だったんだろう？」

「ほ……ほんものなの？」

「エノン。」

総師は、俺のことを殺したいほど憎んでいる。

いや、いつか殺すつもりだろう。

今は、まだその時じゃないだけ」

初耳だった。ラクルゼットは、サリユウの言葉、一句一句を聞き

逃すまいと、耳を澄ましていた。

「だから、俺を殺したら、総師はその願いを果たせなくなる。そして君を、変わりに殺すと思う。」

俺は、君を助けたい。殺したくないんだ」

「：総師に何をしたの？」

恐怖と、不安と、好奇心が入り混じったそれだった。

辺りはすでに、暗闇に包まれていた。しかし、サリュウの横顔は、金髪の髪の間隙から、白く光っていた。

「：殺したんだ。大切な人をね」

「殺した？」

エノンではなく、ラクルゼットだった。

「サリュウ、人を殺したことがあるのか？」

あれだけ、殺人を嫌がっているのに。

いや、逆に：殺したことがあるから、嫌がるのか？

「今となっては、言い訳にすぎないが、あの時は：殺すしかないと思った。」

それしか、思いつかなかったんだ」

「なーんだ、あたしと同じね」

勝ち誇ってエノンは白い歯をみせた。

「あたしも、殺すしかないと思ったの。魔獣を手に入れるのは、魔獣のマスターを殺すしかないって」

「おまえと一緒にするな！！」

サリュウの怒鳴り声が、辺り一面に響いて、木霊した。怒りで、わなわなと顔の筋肉が痙攣した。

ラクルゼットすらも、驚いて体を硬直させる。

呆然としてエノンは言葉を失ったが、すぐに我に返った。

「何が違うのよ！自分のために、人を殺したんでしょ？！人殺しに、良い、悪いなんてない！同じなの！」

「……」

サリュウは強く奥歯を噛み締めたが、脱力して

「そうだな。大声出して、ごめん」

素直に謝った。

「俺は、人を一人殺して、すごく後悔している。

あの殺めた日から、一秒たりとも、罪の意識から開放される時はない。

だから君に、これ以上の罪を犯して欲しくないんだ」

優しくかった。声も、口調も、表情も、心も。

エノンの頬を涙が一粒落ちた。

サリュウはエノンの肩をそっと、抱き寄せた。

刹那、背後の草が大きく揺れた。

エノンがサリュウの胸から、離れて振り返った。

熊はいつでも飛びかかれるように、身を低くする。

背中の激痛をごまかしながら、ラクルゼットも腰をあげた。

サリュウは動かない。

「やっと、追いついた。サリュウの声が聞こえたから、わかったわ」
安堵しながら現れたのは、頭を木の葉だらけにしたミリアナとイゼラーンだった。相変わらず、イゼラーンは飄々と佇んでいる。

「……ん？」

場の異様な雰囲気を感じたのか、ミリアナがそれぞれの顔を見回した。

「その子は？」

「この人は？」

鋭い口調でエノンが訊いた。サリュウは黙ったまま、ミリアナに視線を向けた。エノンがじろり、とサリュウをみる。

「何で黙ってるの？」

「ミリアナ」

答えたのか、呼びかけたのか、どっちともつかない口調でサリュウが言った。

「色々あって…」

「あなた、魔道士ね？」

エノンはミリアナとイゼラーンを見据えた。10歳の子供だと思えない、冷徹な眼差しで。

「…ああ」

ミリアナも察知したようだった。

「あなた、エノンⅡクレイパスね」

意外にも淡々と答えたので、ラクルゼットは感心した。腐っても公安執行部。

魔道士を取り締まる、魔道士か。

「ギルド裁判へ出廷命令がでています」

ミリアナは羊皮紙をエノンの鼻先に、押し付けた。

「これは任意ではありません。拒否すれば、どうなるかわかってますね？」

「どうなるの？」

羊皮紙を目の前にしながら、エノンは普通だった。

「よくわからないんだけど」

「死ぬのよ」

即答だった。

「まあ、どうせ裁判受けても死刑だと思うけど」

エノンはミリアナではなく、サリュウを睨んだ。

サリュウは首を横に振った。死刑ではない、と。

しかし、エノンの顔は真っ赤に変色した。

「……あたし、死なないっ」

脱兎のごとく、エノンは走り出した。

イゼラーンが瞬時に反応したが、その前を黒い壁がふさいだ。

壁が咆哮すると、耳の奥まで振動した。

「どきなさい！」

ミリアナが叫んだが、熊は後ろ足で立ち上がったまま、彼女を見下ろした。

「命令される筋合いはない」

「おまえも殺すわよ」

「ミリアナ、やめるんだ」

サリュウが制した。

「その魔獣も、行かせてやれ」

「は？なにを言ってるの？最初の約束、忘れた？」

リユートを返してもらおう。・・・いや、協力しなければ、自分を殺すとミリアナは言った。

「忘れては居ない。でも、今は逃がしてやれ。どうせ捕まえられる
い」

「何言ってるのよ！！今追っかければ、間に合うわ」

「どうせ、サリュウの力借りなきゃ、捕まえないんだろ？」

ラクルゼットが口の片端をあげた。

「おまえも、エノンを捕まえられなきゃ、ギルドに殺されるんだろ
？」

「……っ」

凶星だった。

「はやく、行ってやれ」

サリュウは熊に目で合図すると、熊は踵を返して、エノンのほうへ走り去った。

第1章・・・7

「この魔獣は？」

エノンたちが完全に見えなくなると、イゼラーンは側に倒れている白い獣を顎でさした。

喉元を血で染めて、倒れていた。腹が規則正しく上下している。

まだ生きていた。だが、ラクルゼットの一撃が、かなり重かったらしく動けないでいた。

「無事だったのか」

サリユウは全身の痛みをこらえて、這うように獣の側に近づいた。生死を自ら確認して、ほっとした表情を浮かべる。

「よかった」

「魔獣はそんな簡単に死なないって」
後ろからラクルゼット。

「ごめんな。俺を守るためだったとはいえ、君に怪我を」

サリユウが顔を覗き込むと、空気の抜けたような音を獣が発した。

「声が出ないんか？」

ラクルゼットが、首を斜めに傾けた。

「まあ、喉に噛み付いたからなあ」

「ちよっと、のいて」

ラクルゼットを押しつけ、ミリアナが獣の横にしゃがんだ。

そして、穴のあいた喉元に手をかざした。

青白い無数の光が、白魔獣の怪我に集中した。

みるみるうちに、傷口がふさがれていく。そして、完治した。

「へー、やるねえ」

ラクルゼットが口笛を吹いた。

白い魔獣は、腰を上げ、立ち上がった。傷は治ったが、体はまだ血に汚れている。

「ありがとうございます」

澄んだ声で、ミリアナにお礼を言った。その後ろにいるイゼラーンにも目をやる。

「ありがとう」

イゼラーンの魔力で、魔法を使ったのを分かっているようだった。

「無事で何より」

イゼラーンは、深く頷いた。魔獣はサリュウに、姿勢を正した。

「私は霧の魔獣、シャーカイングと申します。」

先ほどのご無礼をお許しください」

「俺はもうギルドの人間ではないから、気にしないでくれ」

サリュウは困った顔で、片手を振ってみせた。

シャーカイングは深く頭を垂れ、

「では、失礼します」

と、その場を去ろうとした。

「ちよっとまってくれないか？」

腰をさすりながら、サリュウが引き止めた。

のろりと、シャーカイングが首をあげた。

「はい」

「聞きたいことがあるんだ」

サリュウは目を細めた。

「彼女：エノンが、なぜ魔道士を殺害し、魔獣を複数、所持しているのか、理由を知りたい」

「それは：言ってしまったて、構わないんでしょうか？」

エノンの立場を、悪くしたくないらしかった。

「あなたが、何を喋ろうと、別にギルドには報告しないわよ。」

私は、エノンを拘束して、ギルドに届けるのが仕事だし。

ね、イゼラーン」

ミリアナがイゼラーンの頭を小突くと、イゼラーンは神妙な顔を浮かべた。

「マスターの言うとおり」

「そうですか」

二人のやり取りをみて、シャーカイングは一応、納得したらしかった。

「マスターは、魔術師ギルドに存在する、厳しい縦社会に反感を抱いています。そして、私たち魔獣に対する、取り扱いの酷さに

嘆いておられるのです」

「嘆いているって・・・おまえを、置いて逃げちゃったじゃねえか」
ラクルゼットがせせら笑った。

「確かに、先ほどはそうでしたが、取り乱しておいでだったからです。

まだお若いので…。

普段は、私たち魔獣のことを、とても大切にしてくださいるんです。ですから、マスターは一匹でも多くの魔獣を保護しようとしているんです」

「別に酷い扱いだとは思わない」

イゼラーンが珍しく、強い口調で否定した。

「それほど不当な扱いは受けていない」

「あなたの言葉も分かります。私も、魔獣ですから」

霧の魔獣は、まっすぐイゼラーンを見た。

「ですが、魔法を使うという行為は、それだけで私たちの寿命を縮めているのです。

魔力は、私たちの血であり、命ですから。

そんな魔法を、湯水のように使ってしまう魔道士たちが、マスターは許せないのです」

魔獣はめったなことでは、自ら魔法を使わない。

肉体を傷つけてでも、肉弾戦を行うのも、そのためである。

死ななければ、生物に、自然治癒能力があるからだ。

ミリアナは腕を組んだ。

「人間はそもそも、魔獣が極端に負担になるほどの魔法は使えないわよ。

逆に、人間が死ぬわ。

考えは確かにご立派だけど、現実を見て欲しいわね」

冷静かつ客観的な意見だった。

サリユウも、同意見だった。

「君は、もともと：エノンの魔獣だったのか？」

「いいえ、違います」

シャーカイングは否定し

「私の、もともとマスターは殺されました」

あっさりと、回答した。

「マスターを殺した奴に、よくついていけるねえ。

俺はサリユウが殺されたら、そいつを絶対殺すぜ」

半ば飽きれてラクルゼットが感想を述べた。

「別に、サリユウはマスターじゃないけど」

と、付け加えるのも忘れない。

「私も、マスターが殺されたら、相手を殺したいと憎むと思う」

イゼラーンは少し悩んで、言葉を選んだ。

「でも、私たち魔獣は、人間に仕えるしか、生きる術を知らない。

私も、もしそうになったら：同じ道を歩むかもしれない」

「……」

サリユウは憎いと思った。

魔道士を敬うように教え込まれ、魔道士がいないと生活の手段を与えない。魔獣に生まれながらに洗脳し、教育した、魔術師ギルドを。

エノンは一心不乱に、森の中を駆け抜けていた。

草が足を切り、枝にひっかけて服が裂ける。

それでも、エノンは闇の中をがむしゃらに走り続けていた。

「マスター、まって」

熊は大きい図体で、必死にその後をおった。密集する木と木の間

をぐりぬけられてしまつては、迂回しないとならないので、遠回りになってしまう。

それでもなんとか、見失わずにいるのは、やはり動物と人間の身体能力の差だった。

「もう誰も追つてきてませんよ。大丈夫です。俺がいれば、大丈夫です」

やっとエノンは足をとめた。

肩で呼吸する、その音が辺りに広がった。

「ごめんね」

振り返ったエノンは目を真つ赤にさせていた。

「マスター…」

熊が声をかけると、エノンは熊の首にしがみついた。そして号泣した。熊は優しく、前足でエノンの頭を撫でた。

暫くして泣き止み、落ち着くと、エノンと熊は同じ方向を向いて並んで座った。下のほうに、民家の明かりがいくつも光るのがみえた。

「ハック、あたし、わからなくなっちゃった」

両膝をたて、それを両腕で包むようにエノンは座っていた。

「あたし…、これからどうしたらいいと思う？」

ついに導師まで、やってきた。

もう、逃げられないかもしれない」

「先ほどの導師は、俺が聞いたところによりますと、

12年前に脱退してるはずですが…。

確かに、有名な方ですが」

「脱退したってのは表向きかもしれないでしょ？

ああやって、逃亡した魔道士たちを裏で処罰してる可能性も十分にあると思うの」

30年に一人の逸材、いや100年に一人の逸材といわれた導師なら、適任だろう。

「それに、魔道士と一緒にだったってのも、へんでしょ？」

「たしかにそうですね」

熊―ハックは肯定した。

「でも、マスター。正直言って…あのサリュウという導師さまは、噂によりますと、

総師ですら全く歯が立たない実力の持ち主らしいです。

いざとなったら…、我々など赤子同然でしょう」

「…逃げる？」

なぜか、エノンの目はきらきらと輝いていた。

1%もない確率にかけるのか。むしろ、そのほうがスリルが楽しめるとでも思ってるようだった。これは遊びではない。

ハックは内心呆れたが、表面上では合わせて楽しげな顔を作った。

「マスターが逃げるなら、どこまででも、お供しましょう」

第1章・・・7（後書き）

やっと一章が終わった・・・（笑

第2章・・・1

「サリュウ」

名前を呼ばれ6歳の彼は、本から視線を外して声の方向に振り返る。

「お兄ちゃん」

声の主はナサニエルだった。

気づくと、あたりは闇に包まれようとしていた。

サリュウは手元にあったランプに、慣れた手つきで火打石で明かりを灯した。

そしてナサニエルの近くの机に置く。

「また本が増えたな」

椅子を引き寄せながら、ナサニエルが本の山を一瞥した。

ここは、魔術師ギルド総本部にある、導師の部屋だった。

端から端まで、歩いて10歩程度の部屋だが、本という本に埋め尽くされ、他に見えるのはベッドと小さな丸机。そして、引き出しの付いた勉強机のみだ。

「うん。本を読むと、あれもこれも勉強しないといけないって思うようになるんだ。だから、つつい読む本が増えちゃって」

「…これも読んだのか？」

無造作に置かれていた、臙脂色えんじの表紙をした、分厚い本だった。

ナサニエルは膝に引き寄せ、ページをぱらぱらとめくる。全て、古代魔法文字で書かれた本だった。

古代魔法文字は現代ではすでに、廃れているため、使われていない。

しかも、語彙の羅列が複雑で、規則性をもった言葉ではないため習得が非常に困難な言語だった。古代魔法文字を専門に研究している人ですら、何十年かかってやっと、読めるようになるとされていた。

「だいたいは読みました。といっても、興味のあるところだけだけだ」

「……」

興味のある部分を、読み取れただけでも、読解力がある証拠だった。

ナサニエルは無意識のうちに、捲ったページの羅列を指で追っていたが、はっきりと読むことが出来なかった。けして、始めてみる文字ではないのだが。

サリュウは自分が持っていた本をナサニエルに差し出した。

「今はこれを読んでるんです」

「ほう」

受け取り、表紙を見る。よく見慣れた共通語で書かれた本に、ナサニエルはなぜかほっとした。

上級の魔術書だった。ほんの一握りの魔道士のみが習得できるとされている魔法が記されていた。

「出来そうな魔法があったのか？」

「出来そうっていうか、面白そうな魔法がありました」

「面白そう？」

サリュウの言い方に、胸のざわつきを感じつつナサニエルが問うた。

「どんな魔法だい、それは」

「はい」

言うが早い、サリュウは両手を机にかざした。そして、右手で空に印を描く。音もなく光の粒子が現れ、小さな手に集まってきた。

ランプの明かりよりも強く、その場を青白く照らした。

粒子はまるで己の意思を持てるように、宙を舞い、互いにぶつかりあいながら、ひとつの形をつくっていったのである。

それは完全に形を作ると、光を失い、しかし、今度は生命の輝きをともしていた。静かに、心臓の鼓動が動き出した。

「これは・・・」

ナサニエルは思わず、絶句した。

そこに、小さな、トカゲが現れていた。

サリユウが手を差し出すと、トカゲはサリユウの手によじ登り、腕を伝わって、肩にとまった。

「命を生み出す魔法です。面白いかなあって」

「……」

ありえなかった。

そんな高度な魔法、能力が高い低いの問題ではなく、夢物語の世界での話だった。

なのに、サリユウはいとも簡単に…、あたりまえのように生命を生み出していた。

「い…いつからそれを？」

動揺を知られまいとしながらも、ナサニエルの鼓動は激しく高鳴っていた。

サリユウはトカゲの頭を撫でながら

「さっきです。本で見つけて」

あっさりと答えた。

「そんなに難しい魔法じゃないですけど、さすがに人間とかはもうちょっと勉強しないといけないかなって？」

「……」

背中に冷や汗が流れた。

「どうしたの？」

サリユウがトカゲの頭を、指で叩くと一瞬にして光になり、雫が落ちるように床に吸い込まれていった。

「まあ、がんばりなさい」

「……？」

きょとんとしているサリユウの視線を背後に感じながら、ナサニエルは逃げるようにして、部屋を出た。

膝が震えていた。額に冷たい汗が浮かんでいる。

はつきりと、恐怖が迫ってきていた。

と、ナサニエルは笑い声を洩らした。

「やっぱり…」

可笑しくてたまらない、という様子で口を抑える。

「あいつは悪魔の子だ…」

喉をつまらせたように笑いながら、ナサニエルは廊下を歩き始めた。

第2章・・・2

ナサニエルの消えたドアをみつめながら、サリュウはため息をついた。

最近、何をしてもナサニエルは褒めてくれない。

まだ勉強が足りないのかと思う。

本をとろうとして、手を机に伸ばした。そのとき。腕に何かが当たって床に落ち、金属音が木霊した。

見ると、南京錠が落ちていた。

拾い上げ、ランプにかざす。

錆と傷が酷かった。何かがでひっかいたような跡。黒い…よくみると、赤い染み。

いとおしげに、それを指で撫でる。

鍵をしめて、指でそっとこすると簡単に鍵があいた。急に悲しみがこみ上げて、机に突っ伏した…。

今から1年前——サリュウが5歳のとき——魔術師ギルドに、やってきた。

もともと山奥の村育ちだったサリュウにとって、

魔法都市ミュランダに聳え立つ、ギルド総本部の建物自体が、驚愕と幻想の世界そのものだった。

魔法都市ミュランダは王都アサムに次ぐ、広さと産業をほこる大都市で、人口はそれほど多くないが、魔法で建造されたそれは、一般的な家並みと一線を画していた。

時間によって七色に変化し、季節によって色づき、まるで町全体が生きているよう。魔道士でない人間も多数住んでいたが、魔道士と魔獣が平然と街を歩く姿をみれるのは、このミュランダ独特だ。

ミュランダの中心部には、天高く聳え立つ建物があった。円錐の形をしたそれは、遠くから見ると何も見えないのに、近くによると現れる。その建物こそ、魔術師ギルド総本部だった。

初めてそれを見たときの期待や、夢、そういったものは碎れるのは簡単だった。

ナサニエルはサリユウに次々と魔法の課題を与えた。手を使わずに物を移動させる魔法だとか、暗闇を照らす魔法など。完璧でなくてもいいといった。ほんの少しでも、できればよいと。でも、サリユウは全く出来なかった。

「こんなこと、できない」

泣いても喚いても、ナサニエルは相手にしなかった。

「やれ」

その一言で部屋を後にする。

6日目までは、寝る間も食べる暇も惜しんで努力した。だが7日目になって、諦めた。自分なりに色々工夫したが、魔法を使える感じすらしなかったからである。

椅子に座って転寝をしていると、頬に強い痛みを感じて目を冷ました。気づくと、床に倒れていた。椅子から落ちたのではないことはすぐに判った。

恐ろしい剣幕で、ナサニエルがそこに立っていたからである。

「なにしている？」

冷淡な声。

サリユウは頬をさすりながら、起き上がった。泣きたかったが、我慢した。

「魔法なんかできないんです」

「なんていった？」

ぴくり、とナサニエルの片眉が動いた。

サリユウは視線を床に落として、再度答えた。

「もう、魔法は無理です。そんなの、使えない」

「寝ぼけたこというな。やれ」

「寝ぼけてない。できない」

また、叩かれた。本気ではないのだろうが、5歳の子供に、大人の力は強すぎた。

簡単に体が飛ばされ、壁に強く当たった。強く背中をうち、骨が軋んだ。無意識のうちに涙がでた。だが、声は出すまいと必死に歯を食いしばった。

「おねがいします。僕、魔法なんか使いたくない。帰りたい」
溢れる涙に、腕で顔を拭いた。

必死だった。自然だけしかない、何もない小さな村だが、そっちに
いるほうがずっと幸せで楽しいと思った。

「こりゃ傑作だ」

ナサニエルは楽しげに手を叩いた。次に、冷酷な双眸をする。

「どこに帰るんだ？」

「自分の家です」

「家？お前の帰る家なんて、もうないよ」

「あるよっ。お父さんとお母さんがいる家にかえるっ」

「勘違いしてないか？」

ナサニエルは膝を折ってしゃがむと、サリュウに顔を近づけた。
子供からみても、彼の顔は美しく完璧だった。

「おまえは、ここに自分できたのではない。」

ここに、捨てられたんだよ？」

サリュウの顔が蒼白になる。

「おまえは、捨てられた。売られたんだよ。私に。
帰る家なんてない。おまえの場所はここだけだ」

ナサニエルの言葉に、全身の血の気がひいていった。

涙さえも枯れはて、髪の毛が逆立った。

「いいか、サリュウ。おまえが魔法を使えなければ、私にとっては
用なしなんだよ。」

わかったなら、魔法の練習をしろ」

「：でも、ほんとうに僕、魔法なんか使えないんです」

声が震えているのが自分でも分かった。

ナサニエルの表情が鬼になった。

突然、サリュウの腕を強く捻りあげると、部屋から引きずり出し

た。

体を床に激しくぶつけながら、廊下を移動する。

「いたいよおっ」

サリユウが懇願するが、ナサニエルは引きずったまま、歩くのをやめない。そして、投げ入れられる。

狭い箱に。

「そこで、死ぬんだな」

感情ないナサニエルの口調。扉が閉められる。

一瞬で暗闇に包まれた。

「あけて！」

壁を叩く。蹴る。怒鳴る。叫ぶ。だが、物音ひとつしなかった。

「なんで…」

こんな目にあわないといけないのか？5歳のサリユウにはまるつきり検討がつかなかった。箱だと思ったが、小さい部屋だった。

なんとか立てる高さで、やっと膝を折って座れる床面積。

そして、明りはついていない。だが、全くの暗闇ではなかった。

壁の一箇所に穴があいていて、光が差し込んでいる。

外をのぞく。みえたのは、白だけだった。どうやら、白い壁の部屋らしい。手をいれてみる。ちょうど、腕が肩まで差し込める穴だった。

扉が開かないか、手で弄る。

腕を穴にいれてしまうと、光が完全に遮断してしまうため、急に孤独になり胸が苦しくなって、涙が溢れ出した。

泣きながらも必死で手を動かしていると、何か、硬いものにあつた。

それが何か突き止めようと、神経を指に集中させる。

…どうやら悶かんぬきだった。

これで出られる！歓喜して、悶を探るが、取っ手と思われる部分はびくともしない。

「なんで…」

更にとめどなく涙が頬を伝う。

門には、南京錠がかけてあった。

扉を両手で叩いた。

「出してー！！ごめんなさい！魔法の練習しますから。おねがい！
だして！」

何度も叩いた。拳の皮が破けた。声が枯れた。それでも、諦めなかった。

自分の出す音以外、何も聞こえない。

人の足音も、物音も、呼吸する音すらも。

何回も謝った。お願いした。

それでも、誰も来なかった。

叩くのを諦めて、床に座る。足は伸ばせない。膝に顔を埋めて号泣する。

恐怖と絶望が、心を支配した。

待った。どれぐらいの時間がたったのか分からないほどに。

誰か来るのを、ただひたすらじっと待った。

水も食べ物も与えられない。

自分が生きているのか、死んでいるのかも確認されることもない。
孤独。

「死にたくないよお！」

気づいたら、無意識に叫んで扉を叩いていた。

もう、壁を叩いても手に痛みは感じない。完全に麻痺してしまっていた。

だが、やはり誰も来ない。

いつの間にか寝てしまっていた。そんなことを、何十回繰り返した
ただろう？

喉も枯れきって、空腹で腕の力も入らない。

もう、叫ぶ元気もない。

次に我に返った時、右手は無意識に南京錠を掴んでいた。
そうだと、思う。

この鍵を開ければ、外にでられるんじゃないか？

なんでそんな簡単なことを思いつかなかったんだろう。

絶望が、希望に変わった。

なんとか鍵をあけようと、南京錠の堅い体を握る。引っ張る。鍵穴をこじ開けようと爪でひっかく。だが、どれも無駄だった。鍵はその金属の体であざ笑うかのように、静かにたたずんでいる。

半狂乱だった。

爪が剥がれるまで、鍵をひっかきつづけ、関節が曲がらなくなるまで、引っ張った。

喚いた。壁にあいた穴に絶えず腕を入れていたため、穴と摩擦で腕の皮はすりむけ、血がでていた。

急に吐き気がし、戻っていた。

自分の服にかかった。吐いたのは胃液だった。

もう、何日も何も食べていない。飲んでもいない。

水が飲みたい。

口の中が、血の味がした。

一瞬、意識が飛んだ。

そのとき、カチリ、という小さな音に耳が反応した。

脳が動く。はっと、目をあける。

指を動かすと、今までにない感触があった。

「……っ」

門が外れた。

扉が開いた。光が全身いっぱいに注ぎ、まるで天国にいるようだった。

「良くがんばったな」

ナサニエルが両腕を広げて、そこにいた。

優しい微笑みを浮かべて。

「ごめんな。でも、サリュウなら絶対にできると、私は信じていたんだ」

自分を地獄に陥れた男は、なぜか神にみえた。

サリュウはナサニエルの胸に飛び込んでいた。
優しく抱擁される。

「私には分かる、おまえにはすごい才能がある。努力すれば、きっと一流の魔術師になれる。私の言うことを聞いて、勉強するか？」

「うん。僕、がんばる」

「よし、いい子だ」

ナサニエルのそれは、母の手よりも、優しかった。

それから、サリュウは今まで以上に魔術の修行をした。ナサニエルは新しい魔法を覚えるたびに、優しく褒めてくれる。それだけが嬉しかった。

めきめきと実力をあげ、何の挫折もなくギルドの上位へと進んでいく途中、あることに気づいた。

話し相手が、いない。

サリュウが通ると、他の魔道士たちは一斉に、こちらに注目した。そして恭しく、お辞儀をする。話しかけると、愛想笑いをして、逃げるように立ち去っていく。

いつも一人ぼっちだった。

それはサリュウがナサニエルのお気に入りであることが、最大の原因だった。

魔術師ギルドでは、実質的な権限を握っているナサニエル。

ナサニエルは自分に齒向かうもの、気に入らないものには容赦なかった。

もしも、怒らせたただではすまないことは周知だった。そのため、おいそれとサリュウに話しかけられるわけが無かったのである。

サリュウは魔法の勉強をするしかなかった。

彼にはそれ以外、なにも与えられなかった。

魔法を覚え、ナサニエルに認めてもらう。それだけが、生きがいだった。

だが、そのうちナサニエルは、手放しに褒めることをしなくなつた。

はじめは、もっと高いことを要求してるのだと思った。
だが、どこかよそよそしいのである。

表面上はいつもどおり、優しいナサニエルなのだが…。

サリュウも普通を装い、接した。しかし、心を完全に閉ざすのに、
そう時間はかからなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5211h/>

吟遊詩人サリュウ

2010年10月10日19時42分発行